

# 軍師・参謀を 志す人のために

Vol.27

風雨となる兆しの中で



軍師・参謀を志す人のために

Vol.27

## 風雨となる兆しの中で

- 古典的な弱肉強食の世界への回帰 4
- トップによる傲岸無礼な発言 8
- 交渉における脅迫の方法 14
- 脅しの手法を用いるとき 22
- 沈没しそうな船から逃げ出す 26
- 人の意見を顧慮せぬ直感 30
- 専門的な知見に立脚しない決断は 34
- 力による対決が始まる気配のもと 42

---

## 古典的な弱肉強食の世界への回帰

---

### ◇ ロシアによるウクライナ併合

今年（2018年）5月15日に、ウクライナ南部にあるクリミア半島とロシア本土との間を結ぶ、大きな橋梁（全長19キロ）の開通式が行われました。この橋は、ロシアが2014年3月に自国へ併合したクリミア半島を実効支配する象徴として、プーチン政権が特に力を入れて建設を急いでいたものです。

ロシアのプーチン大統領は、2014年2月に隣国のウクライナにて親ロシア政権が倒れた直後に、ロシア系住民の割合が高いクリミア半島へ軍の武装部隊を展開し、ウクライナの領土であるはずのこの半島をロシアに併合（ウクライナからの分離独立とロシアへの編入）をしてしまいました。国連総会では2014年3月に、ロシアがこの併合の根拠としている、クリミアでの住民投票を無効であるとして各国に併合を認めないよう求める決議も採択されています。

### ◇ 中国の影響力拡大政策

一方、視線を東方へ転じると、中国の習しゅうきんべい近平国家主席は「一帯一路」という構想の実現を図ろうとしています。これは、かつてシルクロードとして人と物資の往来があった、中国西部から中央アジアを経てヨーロッパへ至る「一帯」や、同じく海のシルクロードとして栄えた、中国沿岸部から東南アジア・インドそしてアフリカや中東、ヨーロッパにつながる「一路」について、巨大な経済・外交圏を形成しようというものです。

中国はこの構想のために、国内総生産（名目GDP）世界第2位となった自国の経済の力を背景に、この「一帯一路」に沿って存在する国々に対してインフラへの投資や貿易の拡大を進めています。この動きはどうか、これらの国々で中国への経済的依存度を高めさせて、やがて中国の権益を確保し内政にまで干渉していくことを狙った政策の一環であるようです。

---

---

#### ◇ オーストラリアの反発と中国の強気

中国による各国への、露骨な影響力拡大の動きに対して、たとえばオーストラリア国内では、嫌悪と反発の動きが次第に強まってきています。オーストラリア議会では、中国などによる国内政治への影響力浸透に対し懸念を強めており、先頃、外国の利益を代弁する政治活動に事前の届け出義務を課する法案を可決し、さらに、外国の政府に代わって企業の秘密を盗めばスパイ行為だと見なして厳しい罰則を適用するという法律も成立しています。

他方、中国共産党中央委員会の機関紙「人民日報」系列のニュース誌は昨年、オーストラリアはその経済を中国に依存しているながら（中国に対して）感謝するということを知らぬようだ、との論評を行っています。

#### ◇ アメリカ第一主義を掲げるトランプ大統領

さらに視点を米国へ移すと、その米国を再び偉大にするという「アメリカ第一主義」を掲げるトランプ大統領が、この主張の実現のために対外関係で、予測不能ともいえる政策を展開しています。

トランプ大統領は、これまで米国が積み上げてきた国際協調や外交政策を軽視・無視して、自身の発信するツイッターなどを通じて直接的に、狙った対象へ明確な言葉でもって脅迫まがいの発言を行うなど、特有の独善的態度でもって対外政策を展開しようとする姿勢が鮮明です。

#### ◇ 他国との間での問題解決は力で

今日では、こうしたいわば力づくで他国との間の課題を解決しよう、あるいは、直接的な力でもって自国に有利な外交関係を構築しようという対外姿勢は、上で掲げたようなロシアや中国、米国といった大国だけに特有のものではありません。6月にシンガポールにて実施された米国と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）との間でのトップどうしの直接交渉も、結局は、北朝鮮による核兵器開発や大陸間弾道弾の発射実験という、米国への力の誇示があったことが重要な出発点となっていました。

最近の国際社会ではますます、各国は自国の権益をその力でもってあらゆるさまに追求しようとする動きを見せており、世界中で、領土であるとか経済的利益などといったものの獲得を最優先として互いに影響力を

競い合い、時には国際法を無視して相手を支配してしまおうとするほどの争いの起きる傾向が、一層強くなってきたようです。

こうした、大国を中心とした各国による、自身の力の信奉と、自国の利益のためにはそうした力を遠慮なく行使していこうという風潮に対して、国際社会はとまどい、翻弄されつつあるかに見えます。そして、それぞれの国が生き残りを図るために、どのように対応していくのかを真剣に模索せざるを得なくなっているようです。

#### ◇ 古典的な国どうしのような国際関係へ

この小冊子シリーズではこれまでに、各種の中国古典から、さまざまな句を引用させていただきました。こうした古典が書かれた古代中国の春秋・戦国時代という歴史の一時期においてもやはり、当時の「国」どうしの関係では、現代とみに多く見られるようになった、力の信奉とその具体的な行使が広く生じていました。

古代中国の春秋・戦国時代は、読者の皆さんもご案内のとおり、中国大陸でいくつにも分かれていた「国」が、互いにまわりの国々を打ち破りながらさらに勢力を伸ばそうとし、日々がいわゆる「優勝劣敗」の修羅場という状況でした。各国は、自国の利益を求めてさらに覇を競い合い、猛烈な潰し合いを行っていたのです。

#### ◇ 米国大統領の言動を素材に用いて

「春秋に義ぎ戦せんなし」という言葉があります（孟子・盡心もうし下篇じんしん）。

孟子は、この春秋時代の国と国との戦争では真に正義のための戦いは存在しなかったと断言しているのです。つまり孟子は、各国は自身の利益のために力行使しているのであって、たとえそれぞれの国が「自国の行為は正義を実現しようとするものである」と標榜ひょうぼうしていたとしても、それらは単に各々の立場に基づく相対的な差でしかないと言うのです。孟子は、せいぜいあちらの戦争よりはこちらの戦争の方がまだよい方だという程度の違いだ、と考えていたのです。

小冊子シリーズ「軍師・参謀を志す人のために」の第 27 巻目となる本巻では、かつての古代中国でそうであったのと同様に、国々がおのれの利益を追求し自分が持っている力の行使によって他国との間での紛争の解決を図ろうとする現代の動き、とりわけ米国大統領の言動を素材と

---

---

して用いて、「軍師・参謀」的な役割を務める立場の者になりたいと志している読者のかたがたに、今後何か策を組む際の参考となるような、いくつかの検討材料を提供できればと考えています。

#### ◇ 古典の言葉を案内役としつつ

古代中国の人たちは、「<sup>ぜんじわす</sup>前事忘れざるは<sup>こうじし</sup>後事の師」(戦国策・趙策／史記・秦始皇本紀)つまり、「歴史の中で過去に生じたことを忘れずに覚えておけば、それが将来に起きるさまざまなことに対する大いなる参考となる」と、述べています。

この巻では、皆さんに提供する検討材料を整理するに当たって、上記の句に特に政治的な意味合いを持たせることなく、その文字のままに捉えてこれを原点とし、古代中国の人たちが私たちに遺してくれて時代を超えて読み継がれているさまざまな言葉を、あらためて現代に生きる私たちの案内役として用いていくことにしたいと思います。

なお、この巻では、最近の国際交渉や各国首脳の発言等に関する報道をいくつか引用していますが、これらは、単にこの巻での検討の素材、あるいは検討のスタート地点としているだけのものです。つまりこの巻は、そうして引用した記事が報じている交渉等の、その後の進展や成果等に関して、何らかの論評を行おうとするものではありません。

また、引用している中国古典については、原文(漢文)の解釈が書籍(執筆者)によって多少異なっている場合があることにも、ご留意ください。

---

## トップによる傲岸無礼な発言

---

### ◇ 米国大統領の発言

この巻で検討のための素材に用いるものとして、まず、次のような報道記事を掲げてみたいと思います。

主要7カ国首脳会議（G7サミット）は〔6月〕9日、「保護主義と闘い続ける」とうたった合意文書をまとめて閉幕した。しかし、同日午後に議長国カナダのトルドー首相がそれを発表した記者会見の直後、トランプ米大統領がトルドー氏の態度を「不誠実」と非難。

「合意文書を承認しないよう指示した」とツイッターに投稿する異例の事態に発展した。…（中略）…トルドー氏は記者会見で、米国が安全保障を理由にカナダなどに発動した鉄鋼・アルミニウム製品への高関税措置について「カナダを侮辱するものだ」と批判。ただ、サミットについては「協力し続けることの必要性を際立たせた」「間違いなく成功」などと強調。全体としては、むしろトランプ氏との融和ムードを印象づけようとしていた。しかし、トランプ氏はツイッターで「〔トルドー氏は〕会談中は従順だったのに、私がいなくなった後、記者会見で『侮辱的だ』と言った。不誠実で弱虫だ」と投稿。

（2018年6月10日 12:10 配信 朝日新聞デジタル〔括弧内はこの巻の制作者による付加〕）

トランプ米国大統領はここで引用したように、一国（カナダ）の首相について「弱虫」という、たいへんきつい非難の言葉を用いました。さらにトランプ大統領は、トルドー首相以外の各国指導者に対しても、かなりの暴言を吐いているようです。それはたとえば、次のようなものでした。

米紙ウォールストリート・ジャーナルは〔G7サミットに〕同席していた欧州の関係者の発言を引用し、舞台裏を報じている。報道内容によれば、トランプ大統領は、貿易問題やテロ、移民問題が話題に上ると、他国の首脳に皮肉や非難を浴びせた。…（中略）…〔トランプ大統領は〕移民問題に言及した際、安倍首相に対し「晋三〔注：日本の安倍首相のこと〕、君はこの問題を抱えていないが、私な

ら日本に2,500万人のメキシコ人を送り出すことができる。そうすれば君はあつという間に退陣することになる」と語った。さらに、イランやテロが議論になると、フランスのエマニュエル・マクロン大統領に矛先を向け、「君ならこの問題についてよく知っているに違いない。すべてのテロリストはパリにいるからな」と発言したという。(2018年6月16日13:26 配信 時事AFP)

#### ◇ 大統領の側近もその発言を肯定的に認識

他方、トランプ大統領がG7サミットの首脳宣言を認めないとツイッターに書き込んだことについて、同大統領に近い筋(米国国家経済会議のクドロー委員長)は、トルドー首相がサミット閉幕後に記者会見で米国を批判したことがきっかけであって、トランプ大統領が北朝鮮との協議に向かう途中で外交上、弱腰だと受け止められるのを避けるためのものだったとの肯定的な認識を示しています(2018年6月11日07:20 配信 NHK NEWS WEB)。

しかし、米国・北朝鮮のトップどうしの交渉という外交日程が設定されていた状況にあったとはいえ、トランプ大統領のこのような他国の指導者に対する礼を失した発言は、はたして本当に肯定されるべき適切なものであったと言えるのでしょうか。

#### ◇ 古代中国での事例

私たちがこの巻での検討作業に当たり参照しようとしている、古代中国の春秋時代にも、やはり、各国の指導者レベル(君主や諸侯など)どうしで交渉のやりとりをしたり、あるいは、君主たちが一堂に会して直接話し合いをしたりという場がありました。

そうした場で、ある国の君主が、他国の指導者やそれに準じる者たちに対して礼儀をわきまえない行為を示した後に何が起きたのかについて、ある事案の経過が「韓非子」の中に記されています(十過篇)。

古代中国の大陸南部で勢力を張っていた楚という国の王が、諸侯を集めての会合を催した際に、各国から参加した君主や諸侯らに対して、遅刻した者を捕らえて辱めたり、狎々しく侮ったり、散々にやりたい放題をしていました。そのとき、この王の側近である侍従がこうした行動を諫めて、「王が諸侯の会合(という大切な場)でも無礼を働くという姿を



見せているようでは、やがては国の存亡にもつながりかねません」と申し上げました。しかしこの王はそうした意見を聞く耳を持たず、そのまま思い通りに振る舞い続けていたといいます。その後、この王が地方に出かけた際について反乱が起き、王は追い詰められて食べるものにも困るようになって、とうとう自殺してしまったのだそうです。

#### ◇ 現代の米国では

ところが現代の米国では、大統領の側近である通商政策担当の大統領補佐官までもが古代中国とは逆に、トルドー首相を名指しの上で「地獄に落ちるべきだ」などと非難したといいます（2018年6月11日 08:51 配信 NHK NEWS WEB）。トランプ政権は、こうした態度をとることが内外へ与える影響を、どのように考えているのでしょうか。

実際に、米国の北の隣国であるカナダの外務大臣は米国に対して「理性に欠け、感情に訴えるような攻撃は、ほかの国との外交を展開する上で適切でも有益でもない」と強く反論しています（出典同上）。また南の隣国であるメキシコでも、トランプ大統領について「無礼な態度をやめなければ思い知らせてやる」と発言している人物が大統領選挙で当選確実となりました（本稿執筆段階：2018年7月2日 11:34 配信 NHK NEWS WEB）。もちろん、米国内でもトランプ大統領らのこうした発言について、強く非難する声が上がっていました。

この小冊子シリーズ「軍師・参謀を志す人のために」の第23巻では、自分の何げない言動の一つ一つが、特定の強い意味合いを持って周囲の者たちに大きな影響を与える場合があることについて検討しています。たとえほんの小さな言葉であっても、我々の発言は、それを聞いている人々の心の内に何らかの感情を生み出し、そして彼らにこの感情に基づいた行動を誘発するおそれがあります。つまり私たちの発言は、いわば一種の「政治的な意味を持ったメッセージ」となり得るのです。

私たちは、「政治的なメッセージ」を発出したのなら、それを受け取った者からの政治的リアクションも覚悟しなければなりません。

#### ◇ これは駆け引きの策なのか

とある古典には、「多く無礼を行えば必ず自ら及ぶ」という句が見えます（しゆんじゆう きしでん じょうこう 春秋左氏伝・襄公四年）。